

嶋 ちはる

University of Wisconsin-Madison Doctoral program in Second Language Acquisition

Doctoral Candidate

看護・介護に従事する外国人の職場適応実態に関する調査研究

本研究は、経済連携協定（EPA）で来日した外国人看護師候補生が研修先の病院でどのような学習プロセスを経ているかについて長期的な観察をもとに記述することを目的としたものである。病院という仕事場面の中で直面する様々な状況の中で、特に（１）研修担当者と国家試験対策に取り組む場面、（２）看護助手として働いている場面に焦点を当てる。

筆者は2010年の6月から2011年の5月までの一年間、関西地方にある受け入れ病院でフィールドワークを行い、仕事や勉強場面でのやりとりの観察やビデオ録画、EPA看護師や彼らを取り巻く人々からの聞き取りなどを主なデータとして収集した。分析には様々なデータの中に共通して繰り返し見られる特徴的な現象をもとに理解を進めていくというエスノグラフィー的手法を用いた。観察された事柄の中から、（１）漢字語彙習得プロセスや問題解決のためにEPA看護師、研修担当者双方で用いられる種々のストラテジー使用の変化、（２）職場におけるEPA看護師候補生の言語行動の変化、（３）EPA候補生のアイデンティティの葛藤について報告する。